

第6室(書跡)

「一古今目録抄と法隆寺の古記録一」

N18 古今目録抄（ここんもくろくしょう）

聖徳太子伝に関する伝記や法隆寺の寺誌を記したもので、別名「聖徳太子伝私記」ともいう。13 世紀前半に法隆寺の僧侶顕真（けんしん）が上下 2 巻にまとめる。上巻では師匠隆詮から伝授された法隆寺や聖徳太子伝の秘伝を記し、下巻では聖徳太子の舎人調使麻呂に関する伝記と自らが調使麻呂直系の子孫であることを述べている。なお、随所に顕真による加筆訂正の跡がみられる。

N-21 別当記（べっとうき）

法隆寺別当に関する 3 冊の記録。「法隆寺別当次第」「異本法隆寺別当次第」「法隆寺別当補任寺役次第」よりなる。「法隆寺別当次第」は承和年中（838～848）から延文 5 年（1360）までの法隆寺別当の名前と、その任期中の寺内の重要事項を詳しく記している。別当彦祚の項には、絵殿や太子絵伝の絵師名がみられ注目される。南北朝時代の書写になるが、その後に天文元年（1532）までの書継ぎがある。異本の方は、鎌倉時代後期の実乗の自筆本で、これにも文明 2 年（1470）までの書継ぎがみられる。

N22 嘉元記（かげんき）

嘉元 3 年（1305）から貞治 3 年（1364）までの法隆寺寺僧が代々書き継いだ記録である。法隆寺寺内や周辺のほかの寺も含め、堂宇の経営や年中行事などを中心に記している。鎌倉時代末から南北朝時代（14 世紀後半）にかけての混沌とした法隆寺の様子ばかりでなく、大和国内の動乱の様相までうかがうことができ、貴重な史料である。

第6室 染織―絹傘と古代の天蓋―

染織の展示は、法隆寺に伝来した「絹傘」「織物天蓋残欠」を中心に堂内荘厳に用いられた天蓋（てんがい）を展示しています。天蓋とは、古代インドの日傘に由来する荘厳具です。高貴な人々を暑さから守るため差し掛けた日傘は、やがて高貴な人物の目印となりました。このため、仏教においては仏像の頭上に天蓋を表わします。

古代の寺院では他に高僧（こうそう）の頭上や灌頂幡（かんじょうばん）とよばれる特別な旗の頂上にも傘を表わしました。その素材は絹織物のほか、金銅や木など多様なものがあります。ここでは法隆寺と正倉院に伝えられた織物の天蓋残欠（断片）を展示し、飛鳥時代から奈良時代にかけての変化を見ていきたいと思います。

N-31 絹傘（きぬがさ）奈良時代・8世紀

聖徳太子の傘と伝えられている作品です。鮮やかな赤色に染められた三枚の絹を縫い合わせ、正方形に近い形としています。本来は中央の穴に軸木を通し、そこから四方に腕木を伸ばして、そこにこの絹傘を張って用いました。今日の傘のように、軸木は下にむけて伸びるようなものでなく、ちょうど電灯の傘のように、天井から吊り下げて用いたものです。

N-319-26 織物天蓋残欠（おりものてんがいざんけつ）

飛鳥～奈良時代・7～8世紀

天蓋の周囲に垂れる飾り幕が残ったものです。襜をたたんだ幕の上には「蛇舌（じゃぜつ）」と呼ばれる二等辺三角形の飾りがついています。綾織物に表わされた葡萄唐草文や双竜唐草円文（唐草の一部のみ見えています）はいずれも大柄で、中国唐時代の大陸的な雰囲気漂わせています。

I-336-30・31 赤地葡萄唐草文綾天蓋垂飾（あかじぶどうからくさもんあやてんがいすいしょく）飛鳥～奈良時代・7～8世紀

織物天蓋残欠（N-319-26）に見られるのと同様の蛇舌です。飛鳥から奈良時代にかけての蛇舌をみると、鋭角的な二等辺三角形が徐々に鈍角となり、やがてU字形になっていく特徴があります。

*裏面につづく

**I-337-51 赤茶地震襷鳥文藤纈平絹天蓋垂飾（あかちゃじかすみだすきとりも
んろうけちへいけんてんがいしいしょく）奈良時代・8世紀（正倉院伝来）**

ここから先は、奈良の正倉院に伝えられた天蓋垂飾（蛇舌）の断片です。全体にU字形となり、周囲には錦の縁取りが施されています。溶かした蠟を型につけ、スタンプした後に染め上げる藤纈（ろうけち）とよばれる技法で、襷文（たすきもん）のうちに鳥が飛び交う様子が表わされています。飛鳥時代の遺品に藤纈は見られず、奈良時代らしい特色が表われています。

I-337-166・167 黄地唐花文錦天蓋垂飾（きじからはなもんにしきてんがいしいしょく）奈良時代・8世紀（正倉院伝来）

それぞれ異なる唐花文（からはなもん）が織り出された錦でつくられた蛇舌の断片です。蓮の花などを基本形として円形にまとめた文様を唐花と呼び、中国唐時代に流行しました。日本では奈良時代にこの文様がもたらされ、織物のほか、漆工芸や仏像の彩色にも用いられています。上方には針穴が残っており、本来天蓋に縫い込まれていたことが解ります。

**I-337-231 紫地花鳥連珠七宝繫文錦天蓋垂飾（むらさきじかちょうれんじゅし
っぽうつなぎもんにしきてんがいしいしょく）奈良時代・8世紀（正倉院伝来）**

七宝繫（しっぽうつなぎ）とよばれる円形を互い違いに組み合わせた形のなかに花や鳥の文様が表わされています。鳥は花の周囲を囲むように表わされており、平安時代以降、宮廷の装束（しょうぞく）に多く用いられることとなる鳥襷模様（とりだすきもよう）の先駆けをなす形を示している点で興味深い作品です。

I-337-232 白茶地唐花文錦天蓋垂飾（しろちゃじからはなもんにしきてんがいしいしょく）奈良時代・8世紀（正倉院伝来）

二種類の唐花文を互の目（ぐのめ）に配した錦を用いた蛇舌の断片。花卉の部分をよくみると、濃い緑と薄い緑で濃淡が表わされるなど、繊細な技法を見て取ることができます。また白や紫、緑などを重ね合わせた色彩は纏綯彩色（うんげんさいしき）と呼ばれるもので、中国唐時代の美術影響を色濃く受けた奈良時代から平安時代初期にかけて他の美術工芸品にもしばしば見ることができます。